

図 書 紹 介

南亮三郎編：マラヤ・シンガポールの人口構造，アジア経済研究所(東大出版会発売)，1963. 東京，283頁.

本書は中央大学経済学部の南亮三郎教授を中心とした数氏によって執筆せられた著書で，東南アジアに関する著書として近来稀に見る充実した読みごたえのある書籍である。編著であるから多少の重複なしとしないが，分担執筆としてはよく統制がとれている。大体次の如き諸章と執筆者より成っている。

第一章 マラヤの経済，社会および地理的概観（吉田忠雄氏）

第二章 マラヤ連邦人口の再生産構造（大淵寛氏）

第三章 マラヤ人口の基本構造（岡田実氏）

第四章 マラヤ連邦の人口移動（小林和正氏）

第五章 マラヤ連邦人口の社会的構成（同 氏）

第六章 マラヤ連邦人口の経済構造（石南国氏）

第七章 シンガポールの人口構造（鈴木啓祐氏）

この外に南教授による総括と関係文献目録が附加されている。

周知のようにマラヤは比較的人口統計の多い国であるが，本書が中心的に分析しているのは1957年のセンサスであり，何れの章に於ても，きわめて多数の図表をおさめていて，現在のマラヤを知るための不可欠の文献となっている。第一章では人口分析に先立って必要なかぎりの人口背景を明らかにしようとしており，マラヤ連邦とシンガポール，マラヤの人口史，マラヤの地理的環境等の諸節をおさめている。第二章からが人口分析で人口の再生産構造の分析にかなり専門的な人口論の立場が示され，第三章のマラヤ連邦人口の基本構造では，男女別構造，年齢構造，配偶関係構造が取扱われている。第四章マラヤ連邦の人口移動では，国際人口移動，国内人口移動の傾向を示し，第五章マラヤ連邦人口の社会的構成ではマラヤの民族構造，社会文化的人口構造を明らかにしている。第六章マラヤ連邦人口の経済構造では労働力人口，産業構造，就業構造を示している。第七章はシンガポールについて略上記の分析の方向に従って，マラヤ連邦に対応して取扱っている。

評者は本書が若い学徒による真摯な努力の所産であ

り，マラヤ研究に志す者にとって必読の文献であることを認めるにやぶさかでないが，読み進む中若干気づいた点について一言しておきたい。

まず地名の読み方である。例えばセランゴール，ネグリセンビラン，ケランタン等のよみ方が本書ではずっと使用されている。然しマライ語ではもちろんスランゴール，ヌグリスンビラン，クランタンである。普通の英語読みも結構であるが，日本のマライ研究家の間で何とか統一することはできないものか，これは批評ではないが提言しておきたい。然し英語読みにしても Semang (セマング)，Klang (クラング) 式の読み方 (p. 15, 142, etc.) は一寸困るので，Pahang (パハン) と読んであるところもあるので (p. 31) 後者の如く統一して頂くのがよいのであるまいか。

マレーシア連邦が1963. 8. 31に発足することになったが，「このマレーシア連邦の構想によれば，人口の人種別割合で中国人人口は第1位を占めるが，全人口の過半数は制し得ないことになる」と述べながら，なぜ統計が示されなかったのであろうか，本書の如き性質の書物としてはやや惜しい気がする。

マラヤは plural society であるとは外国の著書にも屢々見えているが，本書では複合社会とされている。然し複合形成など plural society の意味とは全く逆な用語法もあるので，これはやはり複数社会として頂く方がよくはあるまいか，マライ人，中国人，印度人の間に社会的距離が大きくて，互に自律的社会生活を送るといのが plural society の意味内容であるからである。

モノカルチャーという言葉も説明が不十分であるように思うので，この点の内容的な教示も必要だと思う。

中国人につき記されている個処で (pp. 139-143) 州別中国人郷土集団の順位など記されていて有益ではあるが，これについては例えば福建人，広東人，海南島人などは夫々いかなる職業に従事する傾向があるのかを示されないと内容がよく理解されない憾がある。

人種と民族という節が設けられて，人種や民族の一般論がかなり綿密に述べられているが，全体を通観すると，この節はやや異質の観を脱れない。註記する

か、もう少し簡単にみればよかったのであるまいか。

政治的統計、ことに投票状況などに就ては統計があるので、これも示して頂きたかったし、宗教に就ても項目はあるが統計が示されていない。例えば印度人と言ってもヒンズーとは限らないので、こう云う点の統計も多少古くとも示しておいて頂くと参考になる。

この種の書物は一般にすぐ古くなる憾みがある。1963年出版のかなり統計を使った OoiJin-BeeのLand, People and Economy of Malaya など本書に参照することは時間的に無理であったと思うが、今後も煩をいとわず補正して頂くことをお願いしておきたい。

(棚瀬襄爾)

荻原弘明：マンナン・ヤーザウィン第五部・第六部、鹿兒島大学文科報告第十号史学篇第七集、1961年同第十二号第九集、1963年。

mnan māha jazāwin dōji: は、1920年刊の Kounbaunshē? māha jazāwin dōji: と共に、原語によって書かれたビルマ年代記の中では、最もまとまったものであり、ビルマ史研究家にとって、必読の書と言う事ができる。

この年代記は、コンバウン王朝の第七代国王バジードーの命によって、1829年に、僧侶、婆羅門、王宮高官等の手によって、編纂されたものであるが、内容の大半は、十八世紀初期に、u:kala: によって書かれた māha jazāwin ji: に依拠しているといわれる。

「南方史研究Ⅲ」の中で、既に、訳者によって指摘されているように、従来、この年代記については、英訳及び仏訳が、知られていた。しかし、いずれも、完訳ではない。

今回の荻原氏の労作は、本邦初訳であるばかりでなく、英仏両訳本に欠けている部分をも、補おうとする意欲が認められ、その全訳が期待される。

鹿大文報告十の七と、十二の九に発表された第五部及び第六部は、原典第一巻の146章から150章までと、151章から161章までとに、夫々相当する部分の邦訳である。ビルマ史の上では、バガン王朝の中期から末期まで、ピンヤ・サガイン両(シャン族)王朝、インワ王朝、ハンタワディ(モン族)王朝の一部等に、該当する。訳文には、前記英、仏両訳本との対照結果に基づき詳細な註、及び元史、元史編伝、元史征緬録等中国側の文献による対照も行なわれていて、読者の理

解を、便ならしめている。

ここで、訳文について、若干の批判を呈したい。訳者は、東洋史、特に、ビルマ史の専門家として、深い知識を有しておられるが、訳文を、原文と対照してみると、全体に恣意的な訳が多いという印象をうける。殊に、訳語が不統一で、甚だしい場合には、原文の一単語に対して、四つの訳語が用いられている場合さえある。例えば、mein:maŋe に対する訳語として、〈女の子〉、〈娘〉、〈若い女〉、〈若い侍女〉の四形の使用が、認められる。

いかなる翻訳にも、つきまとう現象であるが、原語の忠実な訳だけでは、訳語としての流暢さに欠ける場合が、少なくない。従って、原文と訳文との間に、或る程度、訳者の主観的操作が加えられる事は、止むを得まい。しかしながら、「マンナン・ヤーザウィン」が、外国文学の翻訳ではなく、歴史的資料の翻訳を意図するものである以上、そのような恣意は、排除されるべきでは、なかろうか? 訳語や、訳文の表現形式は、常に、原文原語との間に、一定の対応関係を、保っているようにする事が、望ましい。

とはいえ、今回の翻訳は、誠に画期的な労作であり、ビルマに関心をもつ一人として、その早急な完訳を切望したい。

(大野 徹)

Lehman, F.K.: The Structure of Chin Society. The University of Illinois Press, Urbana. 1963. pp. xx+244

本書はイリノイ大学の research associate である著者が1957年2月から1958年8月にわたり、ビルマ西部の丘陵地帯でおこなったチン族の文化人類学的調査にもとづいて書いたものである。チン族は西ビルマからインドのアッサム州、東パキスタンのチッタゴン丘陵地帯にかけて分布する山地民であるが、本書ではビルマ領のチン族に研究の焦点が当てられている。

内容は 1 Habitat, Identity, and History of the Chin, 2 Chin Land Use and Agriculture, 3 Land Tenure and Inheritance, 4 Southern Chin Social Systems, 5 Northern Chin Social Systems, 6 Aspects of Northern Chin Economics, 7 Some Conceptual Structures in Chin Religion, 8 Chin Attitudes and Psychological Orientations, 9 Recent Social and Cultural

Changes, 10 General and Theoretical Conclusions からなっている。

著者によると、英国の植民地支配や第二次世界大戦のような外部的衝撃によってもチン族の文化や社会は基本的な構造変化を受けず、チン族の個性を保持してきたという。チン族はビルマにおいて、二重のエコロジカルな適応をおこなっている。その一つはかれらの技術水準における現地環境に対するものと、他の一つはビルマ文明に対する適応である。そのチン族はいまやビルマ連邦共和国の一員として次第にその社会にくり入れられ、tribal society から Redfield 教授などのいう peasant society に推移しつつあるという。換言すると、著者はチン社会を peasant society の初期的なものとしてとらえている。その場合に、北部チン族のように伝統的に政治組織のしっかりしているものは南部チン族のようにそれが未熟なものよりも、文化の変容に対して、適応しやすいという指摘がおこなわれているのは興味深い。このような観点から著者はチン族に接近しているのであるが、なかでも力点をおいているのは社会組織の研究である。4章と5章にかけて、本書の三分の一ほどのページ数をその分析にあてている。ここでは北部チン族と南部チン族の社会組織が比較研究されている。北部チン族は南部チン族よりも資本蓄積がおこなわれ、社会的階層分化も発達し、政治組織も強固である。南北チン族のこのような差異の原因を著者は生産技術、通商、婚姻制度、儀礼等のあり方の違いに求めて論じている。

本書全体を振り返ってみると、以上の概要にもみられるように、各所に優れた記述や分析がある。しかしながら、限られた紙面に著者はあまりにもいろいろな内容を盛り込もうとしすぎた感がある。加えて、わずか1年半のフィールド・ワークの間に3カ月とか6カ月単位で、調査村をいくつか歩き廻ったために、なにか重量感にとぼしいモノグラフになってしまった。その上、各章でみられる記述や分析が本書全体を通して、一つの文脈に有機的に総合されていないのは残念である。
(飯島 茂)

Maung Htin Aung: Folk Elements in Burmese Buddhism. Oxford Univ. Press, London. 1962. pp. xiii + 140

著者U Htin Aung は Rangoon 大学卒業後 London, Dublin, Cambridge に学び、帰国後 Rangoon

大学英文学教授、1946年学長となり、その間 Burma Historical Commission 及び Burma Research Society の会長として特にビルマ民俗学の確立に努力し、その方面の権威として知られ現在はセイロン駐割ビルマ大使として外交に活躍している。Alchemy and Alchemists in Burma, Burmese Drama, Burmese Law Tales, Burmese Folk-Tales 等数多くの著作を有する。本書は1952より1958年に至る七年間ビルマ研究協会年次大会で順次発表された七篇の論文に、1958年 Atlantic Monthly のビルマ特集所録の「ビルマ仏教に於ける民俗的要素」を加え、更に本書出版に際し新たに書かれた「アリ僧侶と仏教伝来」をつけた全篇九章から成立している。著者の先祖は三十七 Nats の一人と伝えられ、その家系に伝わる神秘信仰の為ビルマ社会に見られる超自然的要素に深い同情と関心を持つ著者は、特に外来文化である仏教に併呑され純粋性を失ったビルマ的なものを、神話伝説、或は風俗習慣の中に求め、伝えようと努力してきた。本書は今日のビルマ仏教に見られる非仏教的要素を取上げ、それ等を Anawrahta の仏教支配が確立した1056年以前の原初形態にまで逆上らせ関連づけようとする意図を以て書かれた。第一章ビルマ仏教に於ける民族的要素から、ビルマの九神礼拝、新年祭、錬金術、魔術信仰、ナットの王大山王、三十七神、得道式、アリ僧侶と仏教伝来に至る九章は、適度の諸譚と実証性を以て論ぜられ、単に読物として面白いばかりでなく、ビルマ社会やビルマ人の根底を流れる思考を理解する上にも欠くことの出来ない知識を与えてくれる。これ等論文の中、特に九神礼拝や得道式、アリ信仰に関するものは、発表当時大きな論争をまきおこし、著者は一時批判と嘲笑の渦中に耐え忍ばなければならなかった。批判嘲笑は学問的というより、むしろ頑迷な信仰からする感情的なものであった。例えばアリは上座仏教伝来以前上ビルマにあった呪術的迷信の祭祀を行なう僧であるとする常識に対して、著者は第九章に於てそれが大乘仏教後期の密教的なものとして印度教の混合であることを明らかにし、現ビルマ人の信仰する所謂純粋に仏説であるとする上座仏教の中にもこうしたアリの的なものが多々残されていることを指摘し、ビルマ仏教の純粋性を誇る世間的常識に頂門の一箴を与えた。本書は更に付録としてタイの新年、灯火の祭り、三十七神の詳細なりすと、及び竜神信仰の

四項を加え、タイ正月 Songkran がビルマの正月 Thingyan を語源としている等文化交渉の資料を豊富に与え、類書の少ないこの方面にあって甚だ便利な概論として一読をすすめたい好著である。

(工藤成樹)

McVey, Ruth (ed.): Indonesia. Southeast Asia Studies, Yale University (By arrangement with Hraf Press). 1963. pp. 471

本書は、Human Relations Area Files の Survey of World Cultures シリーズの一冊であるが、インドネシアについて、同シリーズから出版された旧版(全三巻)の内容とは、かなり趣をこにしている。旧初版は、1956年に、Stephen W. Reed によって編集され、1959年には、John Cookson などにより改訂されている。いずれも限定版であり、内容も百科全書的で、貴重な資料を含んではいるが、現代インドネシアの複雑な諸問題を理解するためには、欠ける所が多い。しかし、本書は、問題重点的にインドネシア全体の分析概観を試みている諸論文によって構成されている。執筆者も地理学の Karl J. Pelzer. 人類学の Hildred Geertz, 華僑研究の G. William Skinner, 経済史の Douglas S. Paauw, 労働問題の Everet D. Hawkins, 歴史の Robert van Niel, 政治史の Herbert Feith, 文学の Anthony H. Johns, 芸術の Mantle Hood と、夫々の分野の専門家が担当しているほか、本書の内容に関するコンサルタントを見ても、Henry J. Benda, John M. Echols, Clifford Geertz, Benjamin Higgins, Claire Holt, George McT. Kahin, J. D. Legge, Daniel S. Lev など、アメリカの現代インドネシア研究の総力を結集した観さえある。

若干の論文の内容を紹介してみよう。Pelzer の自然・人的資源に関する論文は、気象と植物資源の関係、鉱物資源の分布、貯蔵量や人口の増加、移動、分布について論じ、中でも前世紀の人口増加は、衛生状態の改善によるよりも、人口調査技術の発達によるとの指摘は、興味深い。Geertz の文化についての論文にも、インドネシア全体を統一的に概観する努力が見られ、特に文化の地域的、階層的な違いを、大都市の metropolitan super culture と新中産層や農民の文化の対比において、統一的に理解しようとする試み

は、インドネシア社会全体の基礎構造を理解する上に、有益な方法と考えられる。Skinner の華僑に関する論文で注目されるのは、華僑分布の概数であろう。この問題には、土着文化への華僑の同化の程度が当然ひっかかる。同化の程度と内外の政情変化にともなう華僑の政治志向との関連の分析も、示唆する点が少ない。農業については、Pelzer が執筆しているが、新しい資料にもとづき、農地と農産物、人口と土地所有の問題などが取り上げられ、未だ重要な経済活動であるインドネシアの農業の発展のためには、政府による組織的、科学的技術の導入が必要であると、Pelzer は主張する。Paauw は、植民地経済体制から「指導された経済体制」(Ekonomi Terpimpin) までの推移過程を多角的に論じ、Hawkins は、民族主義運動の指導期より重要な役割を演じた労働組織にまつわる諸問題を論じ、労働組織は、比較的安定しているものの、労働意欲の低いことが、今後の問題の一つとなるであろうことを指摘している。

いずれも、現代インドネシアを理解する上に有益な力作ばかりである。(口羽益生)

Geertz, Clifford: Peddlers and Princes, Social Change and Economic Modernization in Two Indonesian Towns. The University of Chicago Press, Chicago and London. 1963. pp. 157

伝統社会から、経済が比較的優位を占める近代社会への移行過程が、抽象レベルの高い二分法(伝統主義対合理主義など)によって理解される時、屢々伝統社会内部の特殊性は無視され勝ちである。しかし、伝統社会の内容は、必ずしも一様ではない。「伝統」から「近代」への変容過程は、「伝統」の在り方によって成り異なっている。この事実を視角を合せて、Geertz は、本書で、東部ジャワの Modjokuto (仮名) 町とバリ島南西の Tabanan 町を比較する。夫々の町の特徴を巧みに浮き彫りにした鮮やかな筆致による比較叙述の仕方も大いに参考になるが、一国の経済発展の理解のために、特定地域の集約的研究は、どのような方法で貢献し、又どのような点に着眼すべきかなどに関する彼の卓見は、同様の問題に関心を持つ者にとって、極めて有益である。

Modjokuto に関する Geertz の秀れた諸研究は、

周知の通りであるが、Tabanan における彼の調査結果は、*American Anthropologist* に掲載された一論文を除いては、未だ公表されていない。本書では、この二つの調査結果が比較される。いずれも独立後、急速に変容しつつある町である。前者では、Bazaar 型経済体制を背景とするイスラム商人 (Peddlers) が、新しい企業体制への移行に主導権を握っているのに対し、後者では、独立後、中央より任命された新しい官吏層のために、政治的エリートとしての地位より転落した旧貴族 (Princes) が、企業経営に乗り出している。両者は夫々、sub-dominant elite としての地位を築きつつあるが、彼らの社会的・文化的背景は目立って異なっている。

Modjokuto のイスラム商人は、地方紳士階層と農民を主体とした伝統社会においては、やや疎外された地位に置かれていた。しかし、彼らの社会では、イスラムを支柱とする禁欲的倫理や個人主義的、普遍主義的世界観が支配的であった。その点、新しい企業づくりの上で、彼らが必要とするものは資本や世界観ではなく、効果的な企業「組織」形成の能力である。これに対し、多分に復古主義的傾向のある Tabanan の旧貴族は、伝統文化のエリートとしての地位を巧みに利用して、旧態の人格関係に基づく古い組織を新しい企業組織に切り替えるのに、余り抵抗を受けていない。唯、古い個別関係主義的献身を土台として築かれた企業組織が、十分な適応力を持ち、能率をあげるように作用しうるか否かに問題が残る。

新しい企業組織を形造る過程が、夫々の社会の伝統の内容の違いによって異なることを、Geertz は詳細に分析する。しかし、このような違いは、無限に異なった形を持つものではなく、そこには一定の規則性が見出されるに違いないという確信に基づいて、彼は最後に六つの興味ある仮説を提示している。

(口羽益生)

Geertz, Clifford (ed.): Old Societies and New States, The Quest for Modernity in Asia and Africa. The Free Press of Glencoe, London. 1963. pp. vii + 303

本書は、シカゴ大学の「新興諸国の比較研究委員会」のメンバーによる最初の論文集である。この委員会は、1959-60年度に作られ、Edward A. Shils を議

長とし、McKim Marriot, David Apter, Clifford Geertz, Lloyd Fallers, Max Rheinstein, Mary Jean Bowman, C. Arnold Anderson, Robert Le Vine によって、運営され、比較を通じて、新興国に共通な社会政治現象の基底に横たわる諸問題を、大学院学生や訪問教授をもまじえたセミナーにおける討議を通じて、社会学的に理解する点に目標を置いている。

本書の副題も示すように、本書の研究対象となる地域は、東南アジアのみに限定されるものではないが、東南アジアにおける新興国に共通な社会的諸問題を比較展望によって理解するために、本書は若干の有益な示唆を与える。しかし、この種の論文集の常として、掲載論文が、必ずしも、総て、一様に所期の目的を充分達成しているとは言い難い。

上記九人の学者によって、夫々取挙げられたテーマは、新興国の比較研究、文化政策、政治的宗教、統合的革新、民主制、法、教育、変動の八つである。より一般的な問題から特殊なものに深化するという方法が採用されている。これらの論文の内、若干のものを紹介するならば、Shils の比較論は、新興国にユニークである共通問題の比較研究の社会学的意味やその視点を取扱っている。新興国にとって共通な問題とは、民族解放という共通な状況における経験より生ずるもので、具体的には、伝統的な農民社会において自国民による近代的行政体の確立とその正当化の政治過程に生ずる問題、近代的経済導入のための国民の説得と教育、知識人と大衆の間に見られる教育的、社会的懸隔、国民の威厳の問題としての伝統と近代教育の融合統一、伝達用具としての言語の統一、文化や経済的利益に絡む地域的対立と国家的統一の問題などである。Marriot の文化政策についての論文も新興諸国の理想主義的傾向を規定する国内的、国際的諸要因を指摘していて、興味深い。例えば、インドにおける仏教の復活は政治的エリートによる国内的統一と国際的威信の獲得のための意識的文化操作と見る。同様の問題をセイロン、パキスタン、インドネシア、アフリカについて検討している。又 Geertz は、新興国の形成過程には、常に、文化的社会的原生主義 (primordialism-tribalism, parochialism, communalism, racism, regionalism などの総称) を打破する統合的革新が見出され、それには幾つかの型がある点を比較によ

て示し、この種の研究が、未開拓の状態におかれ、いまだ十分に理解されない部分が多い点を指摘している。(口羽益生)

Kennedy, R. : Bibliography of Indonesian Peoples and Cultures. Behavior Science Bibliography, Revised edition. 1962. pp. xxii + 207

本書はエール大学並にその附属の Human Relations Area Files によって出版されたインドネシアの民族と文化に対する文献リストである。元来は Raymond Kennedy によって編集せられたものであるが、改訂版は Thomas W. Maretzki 及び H. Th. Fischer 氏の努力に負うところが多い。

この種の書物がエール大学に於て出版されるに至ったのは George P. Murdock の努力に負うところが多く、すでに北米に関する文献が 1941年に Yale Anthropological Studies 第一巻として出版されているが、まことに貴重な努力と感謝する外はない。民族と文化に限ったという点もあって驚嘆すべき充実ぶりである。

編集の仕方もまた用意周到であって、まず Alphabetical Key to Islands, Peoples, Tribal Groups and Tribes の章を設けて部族名、島名等を詳細にあげ、次に雑誌名等の略符をあげる。これが6頁にも及んでいる。いかに雑誌論文などが詳細に調査してあるかが判る。

文献リストはまず Indonesia 全体に関するものをあげ、次に Sumatra, Borneo, Celebes, Java (and Madura), Lesser Sunda Islands, Moluccas に分類してある。

この各項目の中で、例えば Borneo については General, Bahau group, Ngadju group, Land Dyak group, Klamantan-Murut-Kalabit group, Iban (Sea Dyak), Punan group, Coastal Malay Buginese etc., Chinese, Karimata Island に分けて文献をあげており、又その民族の分布図をかかげて誰にもよく判るようにしてある。

このような文献集ができ上るためには国際的な協力がなされており、例えば Cornell 大学の J. Echols, G. McT. Kahin, Library of Congress の C. Hobbs など国内の専門家はいうまでもなく、ライデンの Museum van Volkenkunde の J.P.B. de Josselin

de Jong, R. E. Downs, アムステルダムの Tropical Institute の M. W. Reyers, ユトレヒト大学の J. Gond, A. Teeuw, ジャカルタ大学の G. J. Held 氏などその一部である。

このようなリストが出来るときの協力者の組織などについても教えられるところが多い。

(棚瀬裏爾)

Государственное издательство иностранных и национальных словарей: Индонезийско-Русский Словарь. Москва, 1961, pp. 1171

An Indonesian-English Dictionary. Cornell University Press, Ithaca. Second edition 1963. pp. xviii + 431

最近、ソ、米からインドネシア語辞典の大冊が出た。前者は R. N. Korigodosky 他四人の編集で収容語数は45000とする。後者は J. M. Echols と H. Shadily の手に代るもので概算20000の見出し語数。語数は後者の方が少ないが序文にもある通り、現代の文献を読むに必要なものに制限したせいであろう。前者は古代の文学をも読解し得る語をも入れたとあり、又、民俗、習俗、生物語彙もこの方がずっと多い。後者は語彙は少ないが、各語の文例が相当詳しく出ている。辞書の生命は単に意味の対応訳を掲げるのではなく、いかにその語の適当な文例、使用例が出ているかにある。この点で後者は前者に優る(もっとも、完全という訳ではないが)。後者によって、所謂、辞書を読むこともできる。インドネシア語の特徴は語根語に接頭、接尾辞が付いて更に一つの単語が形成されることにある。語根語に接続可能な凡ての接辞を網羅的に示し、その用例をも掲げた辞書をもって最も完璧なものといえるのである。この両書には出ていないが、Saja be-rumah dikampung ini. <私はこの村に家(を)持つ。rumah=家>のような用例を示していたらきりが無いが、この点で両書は氷山の一角を載せているにすぎず、従来の辞書の域を全く脱していないといえよう。実際の言語の機能の状態はこの両書によってもまだまだ知り得ない。そのような意味での甘さがあることは充分念頭に置く必要がある。

次に音声、表記の説明であるが、ソの方はまだまだ米の構造主義言語学の風が吹き込んでいないらしく(私見では、全く興味を持っていないといえる)、旧来

通りでまず問題もないが(pp. 1105~), 米の方はそのような方法はそれで良いとして Echols は Phoneme の概念が充分分っていないらしい。例えば, hal <事>, sudah <既に> を /hal/, /sudah/ とする一方, achir <終> を /achir/ と解釈するのは何のことか (p. xvi)。achir の発音は [açir] であるが ç は前母音 i の環境によってそうなるからで, 音韻的には /ahir/ である。grapheme と phoneme とを混同してはいけない。更に ra'jat; rakjat <人民>, ma'; mak <母> ((', k は語中で表記上どちらも使われるか, 又は, 全く書かれない) を /raqjat/, /maq/ としてしまっているが, ta'at <信心>; takat <…迄> は夫々 /taqat/; /takat/ となって, 一律に彼のように解釈できない。その上, baik <良い> を /baiq/ とすると kebaikan <美点> は /kəbaikan/ であって /q/ ではない。即ち, 音韻的には baik, ra'jat; rakjat, ma'; mak など /q/ と /k/ とが allophone をなすと看さねばならない。(尚, 彼は ' と何の説明もない ' とを混同して用いているが統一すべきである。)

at random に語彙の方を見ると, ソの方で budu <魚の塩漬>, tuak <ヤシ酒>, unam <宿借り> などの訳に原語をそのまま示し, 説明的な意味が添えてあるが, 一体この原語がロシア語の中で借用語としてどの程度認められているのであろうか。一見科学的に見えるこの方法には問題がある。潔癖になりすぎて意志の疏通が計れないようでは言語の機能をなさない。両書に次のような生活必須語が欠けていた。pulun <(サロンなどを)振って留める>, rimpi <干しバナナ>, selajun <鳥威し> 等々。又, 語源が両書において全く記入されていないが, 特にサンスクリット, アラビア, 近年では, ポルトガル, オランダからの借用語が多いインドネシア語では, 少なくとも前者の記入が使用者の大部分にとって必要であろうと考えられる。但し, 新語が数多く取入れられてあるのは, やはり新しい辞書だけの価値がある。両書でお互いの短所を補いつつ活用すれば, それに越したことはない。(崎山 理)

Teeuw, A.: A Critical Survey of Studies on Malay and Bahasa Indonesia (Koninklijk instituut voor taal- land- en volkenkunde. Bibliographical Series 5). 'S-Gravenhage, Martinus Nijhoff. 1961. pp. 176

マライ (インドネシア) 語の最古の碑文 (7世紀) から現在までのマライ語研究史である。これまでに出版された英, 仏, 独, 蘭, マライ語の殆んど凡ての論文, 書物が p. 91~157 に文献目録として掲げられており, これだけでも結構役に立つ訳であるが, 前半は, マライ語のどういう部門の研究が誰によってどのようになされてきたかが36項目にわたって手際よく述べられてある。Teeuw は彼の見解を加えず出来るだけ客観的に今までの研究を並べ立てるという態度を取っており, それによって現在までの研究傾向が分り, そして今後の研究に無駄のない指針が与えられるであろう。マライ語の言語学的研究において, 音韻, 形態の面では優れた成果も現われているが, 彼もいっているように "syntax" (特に "sentence pattern" 「文型」という概念をも含めていっているのであろう) の研究は未だ "virgin field" のまま残されている (p. 30)。マライ語は, 文の中の語詞同志の結びつきが比較的柔らかく, それらが自由に動き得るところからかつて Marsden がマライ語の文の構成は "natural course of ideas" にあるとあって深い研究に進もうとしなかった傾向は, 確かに今も続いているのである。何か暗黙のうちに分ったものとして扱われてきた "syntax" を今後科学的組上に載せなければならない。

36項目のうち, 最後の4項目は現地での定期刊行物, "Dewan Bahasa" 「言語会議」, "Pembira Bahasa Indonesia" 「インドネシア語建設者」, "Medan Bahasa" 「言語界」, "Bahasa dan Budaya" 「言語と文化」誌上における種々な言語問題, 論争が取上げられてある。特に「受動形」「能動形」の用法の区別の問題は前世紀に始まって (p. 28) 今だに論議されているのである (p. 78, p. 83)。現地人の自国語に対する研究意欲を見るとこの言語の将来が頼もしく思われる。

尚, この書においてマライ語諸方言の項は不完全だから, その中でも今までに出版されたこの同じ Series には入っている "A. A. Cense: Languages of Borneo. Series 2, 1958.", "P. Voorhoeve: Languages of Sumatra. Series 1, 1955." を参照するのがよからう。方言の調査研究はまだ不備だから, これからも強力に行なわれる必要がある。Teeuw は現代最も活躍しているオランダ人のマライ語学者であ

る。この書物の文献目録には出ていないけれども、ジャカルタの Balai Pustaka から "Atlas Dialek Pulau Lombok, 1954." 「ロンボク島方言地図」なども出している（もっとも、これは1951年の同氏による英蘭語版からの翻訳である）。

マライ語研究者の座右にこの書を備えることによって研究がよりスムーズに進むことになる。附録として p. 158~171 にマライ語の実用手引書、教科書のリストが添えられてあるがこれも便利である。

(崎山 理)

Winstedt, R. O. : The Malay Magician, being Shaman, Saiva and Sufi. Revised and enlarged with a Malay Appendix. Routledge and Kegan Paul, London. 1961. pp. 180

宇野円空博士は、マレー人の宗教を、「インド教の果実を民族宗教の肉汁で煮て、マホメット教の容器に盛った」ようなものと概括されている。（マライシアに於ける稲米儀礼）。古くから大陸と島嶼地域を結ぶ懸橋であったマラヤは、様々な人種や文化の交流の場であったから、マラヤの文化が極めて異質的な諸要素から構成されているとしても不思議ではない。本書において、Winstedt は複雑なマレー呪術の体系を構成する異質的諸要素の解明を試みている。

しかし、マラヤの民族宗教は、民族学において、早くから研究されていた為、Winstedt の民族宗教に関する叙述では、別に新鮮味は見出されない。唯、Winstedt の現地についての該博な知識は、従来不明確であった部分を補っている。Winstedt によれば、マレー人の中には二通りの呪師が存在する。一つは世襲の呪師 (pawang) であり、他は、神経症的巫者 (bĕlian) である。専門の呪医は bomor とも呼ばれる。Negritos や原始マレー族では、呪師に対する敬意を表現する意味において、樹上葬などが行なわれたが、農耕地域では埋葬形式が一般的である。巫者の性は、ヒンズー教や回教の影響を受けて、一般に男性であるが、母系制地域では女性である。崇拜の対象となる生霊は、Sĕmangat と呼ばれる生命力であり、それは靈魂ではない。死者靈に似た観念はあっても、祖先崇拜はなく、それは、むしろ人格的生霊である。

このような民族宗教の「肉汁」は、四世紀頃よりヒ

ンズー教の「果実」を受入れる。後者がもたらしたものは、地方の生霊を組織だてる宇宙神の体系、呪術の地位を確立する諸技術（断食、冥想など）、呪文祭詞 (mantra)、占星学、神王の観念、護符などであるが、これらは、呪師や王の神格化には貴重であっても、農民の民族信仰の内容を根本的に変革するものではなかった。

以上の混淆物は、更に十四世紀頃より回教という「容器」に吸収され、アラーの神の統制下に置かれる。しかし、アラーの神は、マレー農民の日常生活から余りにもかけ離れた存在である。嘆願の祭詞、供儀の内容や意味は回教化され、卜占や護符、呪薬も回教の影響を受け、回教徒の悪霊も導入されたが、これらの変化にもかかわらず、農民は、食物の生霊保護のために民族宗教の内容を未だに保持している。農耕儀礼や人の一生の折目折目の儀礼は、回教のヴェールを覆った民族宗教を内容としている。外来信仰を受入れたのは、むしろ、王朝都市や港町の住民であった。

以上の事柄について、Winstedt は具体的に、そしてやや随想的に叙述する。従って、本書は、神々の名や由来に親しみのない者には、理解し難い所も少なくないが、マラヤの社会構造の思想的背景を歴史的に理解する上に、多くの示唆を与えている。

(口羽益生)

Cheeseman, H. R. (Compiled by) : Bibliography of Malaya. Longmans, Green and Co., 1959. xi + 234

この文献目録は副題に示されたようにマラヤとシンガポールに関する、一部又は全部が英語で書かれた文献の分類目録である。1955年 British Association of Malaya の当時の総裁 E. D. Shearn 氏の要求で Cheeseman 氏が採録に当たったもので、図書館としては、Malaya House, Royal Commonwealth Society, London Library, Penang 及び Singapore Library, University of Malaya Library, Washington Library of Congress などに当り、更に官庁や学会としてはフェデレイションの農業、文部、森林及び博物館の助力、SBRAS (Straits Branch of the Royal Asiatic Society), MBRAS (Malayan Branch of the Royal Asiatic Society) 及び Malayan Historical Society の助けを得てい

る。又人としては Richard Winstedt, Victor Purcell, R. E. Holtum, P. E. Wood, 等高名のマラヤ研究家の助けを受けているし、又当然のことながら多くの助手諸氏の努力の産物である。

分類の内容は Agriculture, Forestry and Horticulture; Animals; Archaeology & Prehistory, Bibliographies & Lists; Bibliography & Memoirs; Education; Fiction; Health & Medicine; History; Law; Linguistics; Mining & Geology; Miscellaneous (General, Cookery, Journals, Newspapers etc.); Peoples of Malaya; Plants; Poetry; Religion; Second World War in Malaya; Trade & Economics; Travels; Addenda であり、終りに索引を附している。

この分類の方法の可否については大いに問題があるであろう。例えば一寸考えても地理や社会に関するものをどこへ入れるのか。自然科学的な専門分野については更に問題があるのかと思われる。この点ではやや素人向の分類だとも思われる。一人の著者の書物を改行しないで追込んだ組み方についても図書目録としては長所とだけは言えないようである。

雑誌論文もかなり入ってはいるが、然し試みに若干の書籍や論文を選んで引いて見ると英書は略々発見するが、雑誌論文には記入のないものもあって、全幅的な採録がなされなかったのかと思われる。

しかし何より文献目録としての最大の問題は英語の文献だけが採録せられたことではないかと思われる。この点は副題に明記されているのであるから致し方ないことかも知れないが、淋しい感じをまぬがれない。例えば Martin の Inlandstämme とか Nippold の Rassen und Kulturgeschichte der Negritivölker のような著名なものでも独乙語なるが故に我々はこの文献目録には発見し得ないのである。編集の大方針が変らなければこの点は補われないであろうが、やはり一言せずにはおられない。

マラヤの西欧との接近は周知のごとく1511年のポルトガルのマラッカ攻略にはじまり、1641年のオランダの交代、1786年のケダ王からの英国へのベナン割譲、それからの英国の長い間の経営と続き、漸く1957年8月に独立国となるのである。この間特に英国の統治経営には注目すべきものがあるが、東南アジアに於て最も繁栄しているのであるが、その裏面に於てこの文献目

録に現われているような多数の学者の研究がなされて来たことは注目すべきことである。いろいろの問題はあるとは言え、マライ研究の一つのよりどころとなることは確かであるから、漸次充実したものになって行くことを期待したい。
(棚瀬襄爾)

Fraser Jr., Thomas M.: Rusembilan, A Malay Fishing Village in Southern Thailand. Cornell University Press. 1960. pp. xviii + 281

タイ国の南端、マレー半島中部に位置する Pattani, Yala, Narathiwat 及び Satuan の4県では、人口の80%までがマレー人である。しかも中国人、タイ人は、市や町に居住するのが殆んどなので、この地域の村落人口はほぼ100%マレー人といわれる。Rusembilan というのは、このようなタイ領マレー人の東岸漁村の一つで、ここで、著者夫妻が1956年に行った現地調査の報告が本書である。

まず地域環境、住民、歴史的背景といった序論に続いて、このコミュニティを synchronic に3つの面にわけて考察する。漁業(主にアジ)、農業、交易と商業などの Economic society の面。中央・地方のタイの政治における、あるいは宗教組織の中における Rusembilan を表わす Sanctioning society の面。第3の面の Kin-ceremonial society は、地域社会の構造、イスラム信徒としての村人、しかも精霊信仰の根強い信者、等から述べられている。ここまでは、著者の意図としては、地域社会の平面図を書いたものと見てよい。

これに続いて、人の一生を時間的にたどる生活史(推移儀礼をつなぎあわせたものではあるが)を述べた後で、残る2章をもって、今までの資料を社会=文化体系の理論の中で説明しようと試みる――

始めは米作農民の移住村であったものが、地理的・経済的な要因から、漁を専門的にするようになった。この米作農民から営利的な漁村(大型漁船、モーターボートなどの導入)への移行は、文化的適応と社会的調節を余儀なくすることは勿論であるが、適応と調節が均衡をとって進行しないと、社会構造に更に2次的な変動が生じる。この社会構造の2次的な調節、適応と共に、地域社会の文化の志向とを考察しなければ、全体としての過程はわからない。Rusembilan では

文化の志向は、(1) 経済的には、資本財の獲得、利用を、個人単位で他と競争するようにもくろむなど、個人主義の傾向が非常に強いのに対し、(2) 宗教的・儀式的な面では、イスラム的価値や伝統的な儀礼によって、地域社会の統合、家族をこえる範囲の紐帯、マレー文化への共同の参与などという、共同体的な志向を示す。相葛藤する価値が両極的に存在することは、当然社会構造の変動の仕方に作用を及ぼす。そして、一方ではイスラム宗教委員会からの規制があり、他方仏教国のタイ国政府—行政官からの一方的インプットがこの地域社会に与えられる。タイ国への同化とそれに対する反撥とが又、この村の社会=文化体系を特色づけている——というのである。

民族誌としては片手落ちな所があるし、R. Firthのように Peasant economy を緻密に追究したものでなく、なまじっか理論をこねくりまわしているばかりに、全体として何か物足りない気持を味あわせられる。(前田成文)

Textor, Robert B.: From Peasant to Pedicab Driver, a Social Study of North-eastern Thai Farmers Who Periodically Migrated to Bangkok and Became Pedicab Drivers. (Cultural Report Series No. 9, Yale University Southeast Asia Studies.) New Haven, Conn. 1961. pp. viii+83

著者 Robert B. Textor はコーネル大学出身の少壮人類学者であり、今日エール大学で教鞭を執っている。当初、広く極東に関心を抱き、日本占領下時代には、アメリカ軍政府の民主化計画に職員として活躍し、野外調査に従事したという経歴の持主であるが、1952年、コーネル大学のタイランド・プロジェクトに参加したのを契機として、以来タイ国で数々の社会調査に専念してきたといわれる。

本書では、バンコック在住の農村出稼者の主要形態である「輪タク車夫」の実態が詳細に記述されている。輪タクは、所詮、没落の運命にあるとしても、バンコックの交通機関として、増々重要な役割を演じて

きた。車夫の大部分を占めるのは、タイ国で最も恵まれない東北部の農村人口であって、その動機はなによりも貧困に由来している。かれらは、新しい都会の環境のもとで、多くの問題とストレスに直面している。その一部は親戚・友人・同郷の誼などの非組織集団によって解決されているけれども、労働組合や共済組合などの団体への加入は、より一層効果的な解決を招来するであろう。しかし東北部出身車夫の不定着性、またバンコック出身車夫との間の人間関係、タイラオの伝統的文化型、ならびに組合規則の不適切性が組織集団の発展を阻害している。

これら東北部出身車夫は、勤勉であれば、平均一年ないし一年半の出稼期間中に、比較的多額の金を蓄積しうが、それは故郷の家族達の必需品の購入、家屋の修理・新築、結婚資金、寺院への寄贈、また水牛や土地への投資のために使用される。したがって東北部の経済開発一般にたいしては、さほど大きな貢献をしていない。東北部出身車夫は、根本的に農民であることを自認しており、バンコックで習得した新しい生活様式も、帰村と同時に忘れられてしまう。

車夫達が都会生活の物質的、技術的な側面に価値を見出し、そうしたものが受容されやすいことは当然である。マスコミとの接触、ならびに政治的関心は高まるが、政治的活動に集団的に参加する技能は低い。これに反して、仏教信仰はうすれるどころか、むしろ厚くなる傾向がある。帰村輪タク車夫は、その職業経歴と近代的技術の習得のゆえに東北部の村落開発にとって指導的機能を発揮しうる能力をもっている。その可能性は、政府側が、どのような実験的なコミュニティ開発の計画を打出すかに依存している。

たえず社会問題や村落開発問題の解決を念頭に置きながら、近代化の過程に現われる一事象を記述・分析せんとする著者の実践的態度には学ぶべきものがある。末尾の調査項目も参考になる。ただ、はからずも、面接調査を完全に終えることができぬまま、報告書を作成しなければならなかったため、統計資料が十分だといえないのが残念である。(水野浩一)